

皇産霊神を勧請している。『白川家門人帳』（『諸国御門人帳丙』）の斎藤長門は、やはり斎藤可憐の可能性が高い。

金光図書館所蔵『白川家諸国勧遷留』の文政十一年六月条には、次の記録がある。

六月三十日下ス／一 高皇産霊神〔願人數地之鎮守 官金五百疋半減登ル〕／石州浜田／松平周防守殿蕃中／願人

⑤ 斎藤可憐／申次江戸役所より （／は先に同じ）

文政十一年六月三十日に斎藤可憐が敷地の鎮守に伯家から高皇産霊神を勧請している。日付も明確となった。これは白川家の公的記録であり、『鎮魂祭秘鑑』『写』の内容が事実であると証された。『諸国勧遷留』には「申次江戸役所より」とあり、『門人帳』にも「江戸役所ヨリ申越」とあるので、斎藤長門が斎藤可憐であるとの仮説は成立し得る、と考える。

以上、未だ不詳な点が多い国学者斎藤彦麿について、新事実を提供できた。それは、彦麿が文政十一年六月に白川家へ入門しており、「斎藤長門」と名乗っていたことである。

平田篤胤と道教

——『志都能石屋』『豎宗仲景考』について——

坂出 祥伸

『新修平田篤胤全集』には『志都能石屋講本』（『医道大意』文化八年・一八一二成）『豎宗仲景考』（文政一〇年・一八二七）を考察するが、別に『金匱玉函経解』（文久元年・一八六一）

も収められている。その他にも国立歴史民俗博物館には、『傷寒論』『金匱玉函要方』の注解書の草稿本が多く残されている。

『志都能石屋講本』については、まず、「（孫思邈や張子和などの名医は）医薬と呪禁とを兼ねている」と断言しているのに注意したい。篤胤は「さて医薬の道は、神皇産霊大神より始まり大穴牟遲少彦名神の御受継なされ、なほ広く御撰み有て、此御世より、万国へまでも御伝へ遊ばされたること、見えます」と述べているように、我が国の医学は、神皇産霊大神が創始し、大穴牟遲神と少彦名神が継承したとする『日本書紀』神代巻の記述を引用する。ただし、篤胤は漢方が渡来するまでに早く皇国でも独自に医薬が始まっていたことと、医薬には療病の方とともに禁厭の法があると考えていた。『山海経』『黄帝内经素問』などの漢籍に見える「巫祝」「巫医」の用例を次々に挙げて、これらは医が巫祝を兼ねていた時期であるとし、時代が降るにつれて、両者は分離し、巫祝に対して医あるいは医師、疾医と称されるように、医が独立してきた。しかし、両者はその後も並立して、唐代の医療官制である太医局に、医師とともに咒禁博士、咒禁生を置いているとし、我が国でも同様であり、二柱の神が医療と禁厭とを創始して以来、古代の制度は唐制を模倣しているから、典藥寮には、咒禁博士、咒禁生が立てられていると述べる。篤胤自身の医者としての修業は、「大壑君御一代畧記」によれば、早くも十一歳の時に始まっているが、渡邊金造『平田篤胤研究』所収の書簡「天保十二年十二月二十四日 佐竹侯病氣薬方案」によると、江戸に出て以後の篤胤が学んだ医方は古方派の重鎮・吉益東洞に学んだ和田東郭

(一七四四—一八〇三)の門人・竹井大業(詳細不明)から東郭による治験例を学んだというから、篤胤も古方派の医者として開業していたようである。しかし、一方では、最近ようやく皇国本来の医薬の道が再興しつつある情勢を喜んでゐる。「然るに近頃、わが古学の興りたるより、此道も開け初て、漢方に依らず医療を為す者も、かつかつ出来たるは、然すがに神の御国の印にて、いとも愛たきこととござる。」と。ここで篤胤は「和方」と称すべき医方の一分野が自分の門下に興起したことを誇りとし、その発展に期待していると思われる。篤胤の真菅乃屋時代の塾生に森川宗円なる人物があつて、和方家を自任したということが、早く富士川游により指摘されている。

『鑒宗仲景考』は「大壑君御一代畧記」によれば、文政一〇年(一八一二)の条に「鑒宗仲景考刻成」と記されているので、『志都能石屋講本』とは時期的にかなり後に著されている。その二年前に『葛仙翁伝』が書かれているのを始め、その前後には『五嶽真形図』『黄帝伝記』など道教経典にかかわる著作が多い。本書の内容は「伊吹能舎先生著撰書目」によれば、「古今の偉人、傷寒雜病論、金匱要略方論を医薬の祖典と尊奉するに、其の撰者を張機、字は仲景と伝へ来つれど、史籍に其傳なきことを遺憾に思へるに、此は葛玄、字は孝先と云ひし、真人の寓名なる由を、諸書に徴して、委曲に考へ記されし物なり」と説明されている。つまり、『傷寒雜病論』『金匱要略方論』の撰者を葛玄だと推定し、その文献的考証を試みた著作であり、篤胤なりにかなり広範囲に、緻密に推論を行っている。おそらく、多紀元簡の『医賸』を引用していることでも知られ

るように、当時の医学考証学派の文献実証主義を模倣したかと思われるが、先ずは、現行本『傷寒雜病論』の伝承に疑いを抱かず、残念ながら強引な独断的な推論、考証に終始することになっている。しかし、『傷寒雜病論』を葛玄のような道教的人物と関連づけようとしたことに興味を覚える。

前橋神女と平田門人たち

三 三 松 誠

明治新政府内部に地位を得つつも、維新官僚との対立を深めた攘夷派としての平田門人たちは、政策に対し、直接的な影響力を発揮できず、様々に批判的行動を展開した。そんな明治三年の冬、前橋神女の示した神異の話(後に友清歛真が紹介している)を聞きつけた平田直門の重鎮の幾人かは、神々の權威によつて自分たちの信条の正統性を担保してもらうべく、この、春と名乗る靈媒に、様々な問いを投げかける。春の伝える神々の世界は、平田派的な要素によつて彩られているものの、いざ平田学のスピリチュアルな部分をよく受容した人々を前にすると、政策に関する具体的な期待や、細かな神学的質問に対してなど、十分には答えることができなかったところも窺える。他方、国学者内部の争いのはざままで苦しみ平田家三代目延胤は、この一件について、信用しきることなく、弟子たちの不平を抑えるという政治的効果にまず期待していた。

結局、矢野玄道らの主要門人は、この一件に関わった直後の